

○ パネルディスカッション

・パネリスト

金沢大学人間社会研究域人間科学系 准教授	林 直樹氏
NPO法人TEAM且波（京都府）	小山 元孝氏
十津川村総務課企画グループ（奈良県）	玉置 広之氏

・コーディネーター

NPO法人まちづくり推進機構岡山 代表理事	徳田 恭子
-----------------------	-------

徳田：それぞれの発表を聞いた感想を伺います。

林：私は30年、50年経ったときの話をさせていただきましたが、まさにお二人の事例がぴったりはまるなと感じました。例えば、小山さんは「集落が生き残る要素の根本は何なのか？」に迫っていました。消えた村が消えない村になっていく過程は心強く聞きました。非常に重要なのは「帰村権」のところではないでしょうか。近いところでは、土地の問題。今所有者が分かっているうちに手を打たなければならない。そういう意味で、重要なポイントかなど。また、「TEAM 且波」のように故郷から離れていてもサポートできるという形もあるんだなど。それから、玉置さんのほうですが、子どもことや仕事のことが原因だった昔ながらの集落移転は数が減っている。高齢者の生活維持に特化した現代版の集落移転を考えていかなければならないのではないかと。それが「高森のいえ」の事例ではないか。農園があつたりするのも、非常に重要なことかと思えます。今まで集落で暮らしていた人が、いきなり大阪のマンションに暮らす、それだけで調子を崩してしまうもの。自宅から近くに住めるところがあって、そこではちょっとした土いじりもできる。最終的には、集落移転に似たことができている。とても未来のある話だなと思って聞きました。

徳田：村を捨てて出るわけでない、村を見直すんだという希望を与えてもらったなと感じます。会場から質問はありませんか？

質問：十津川村の話、非常にうらやましいなと聞いていました。現在、9世帯が入居とのことですが、希望者はもっと多いのでは？ 今後、7集落に設置するとのことですが、需要と供給はどのように考えていらっしゃいますか？

玉置：「西川のいえ」では、高齢者向けが2世帯、若者向けが2世帯。隣接で高齢者向けに2世帯を想定している。需要と供給のバランスを考えたときに、確かに足りていないと思う。しかし、高齢者の人口は減少していつているので、現在のニーズをすべて満たすのではなく、時期を見ながら調整して作っていくことも必要。高齢者の方が少なくなったときの活用も念頭において進めている。若者向けの収納スペースなども考慮して整備を進めています。スケジュールとしては、「高森のいえ」が3年かかり、「西川のいえ」も3年ほどかかる予定。すべてを一度に進めることは難しいため、徐々に進めています。「西川のいえ」は6人を想定していますが、ヒアリングした際には希望者は20人くらいでした。

徳田：「高森のいえ」の集落には、「入りたいけど、入れない」という人もいらっしゃるんですか？

玉置：入居したけど体調の具合で退居した人もいますが、募集をかけるとすぐに埋まりました。

徳田：自分の総荷物を持ってくるのではなく、ちょっとしたリゾートのように行ったり来たりはけっ

こうあるんでしょうか？

玉置：実際に行ったり来たりができる高齢者は少ないです。車に乗られない方が多いので、家族が来た時に自宅に戻るといった感じです。運転される方は、不安なときだけ「高森のいえ」に来るとい人もいます。

質問：入居者は、365日のうち、どれくらい自宅にいるんでしょうか。

玉置：車に乗らない人は、360日くらいは「高森のいえ」にいらっしゃいます。車に乗る方は、3分の1は自宅に帰っているようです。

徳田：離村した人が「地域のことをもっと子どもに伝えておけばよかった」と言われていたと。今は、孫にその話をしているとのことですが。

小山：孫をつれて、元住んでいた場所に行かれる方はいらっしゃいます。火災で村が丸焼けになった場所で、準備もできずみんな散り散りになってしまっ。私の「消えない村」の本を読まれて、「何か残したい。あなたの本のようなものや記念碑は作れないのか？」と相談を受けました。離村して61年目の火災が起こった日に記念碑が作られました。執念でしたね。印象的だったのは、除幕式の日みなさんずっと笑っておられ、ずっと泣いておられました。孫をつれて、山菜の取り方や山遊びの仕方などを教えていらっしゃいます。ちなみに、子ども世代は関心がないそうです。

徳田：新しいものを見出すがごとく、若い世代が興味を持っているということは、京都に限らないんじゃないかと思うんです。十津川村はどうですか？

玉置：十津川村には、小学校が2校、中学校が1校、県立高校が1校あります。地域の自然や歴史を学ぶ授業があります。

徳田：それはとても大切なことだと思うのですが、林先生は、大学生をつれて集落に行かれることもあると思いますが。

林：今は、「活性化」を教えているところなんです。学生たちは、無居住集落も知らないんですね。無居住集落は「失敗」「だめだった」という認識になっていると思います。金沢の無居住集落にパン屋さんが1軒あるんです。住民はいないのに、いろんところから買いに来て盛り上がっているそうなんです。パン屋さんの横には直売所があって、麓から通って開いています。「そもそも集落って、なんだったっけ？」という気持ちになる。そういう状況を見ると、学生たちは一気に意識を変えてくれますね。

小山：離村する理由は本当にさまざまで、暮らしの不便や子どものことや仕事のことなど。そこに災害が起きて、一気に離村に流れるという感じですね。

林：東北では、雪ですね。岡山だと、雪の地域で最後の1戸になっても生きていけると思うんですが、東北では無理ですね。数年前に移転した集落があって、原因は地震だったんですけど、「いつかは出ようと思っていた」という話も聞きました。最後の決断は、誰かにしてほしいというのはあるのかもしれませんが。

徳田：離村しても、草刈りに戻ってくるというのは、どういう感じなんですかね。

小山：記念碑のように「ここだけは残したい」というものがあるんだと思います。作業にお金は発生していないと思います。お茶を飲む程度で。3世代で帰省している方もいます。

徳田：記録集にしても、「伝える」ということが大切になってくるのではと思います。

小山：集落がなくなったのに記録集の記載が続いているのは、本当にびっくりしましたね。草刈りをしてお茶を飲んだとか、そういう記録なんですけどね。

徳田：今の区長さんが亡くなられたときは、どうなるんでしょうね。

小山：引き継いでいるところもありますが、集まりの頻度が1年に1回から2年に1回と減っているところもありますね。

徳田：「活性化」は自治体も考えていると思いますが、変わっていく集落にはどう臨んでいけばいいとお考えですか？

小山：温度差がありますね。「なんでわしが区長のときに、こんなややこしい話になるんだ」という方も実際、いらっしゃいました。小さい集落よりも大きな集落のほうがかえって大きく構えて何もしないという話も聞きます。

玉置：集落の人口によっては、もう動ける人がいないところもあります。「高森のいえ」を進めることで、元の集落の人口が減ってしまうという課題も出てきています。自治体としては、並行して見ていかなければならないなと考えています。移住者も増えており、子どもが0人だった集落が8人まで増えているところもあります。移住者には住む家が必要なので、そこも課題ですね。

徳田：行政はやることいっぱいですね。

玉置：幅広く対応していています。

徳田：活性化を進めつつ、離村への対応も行っていく必要がありますね。

林：選択肢を増やす必要がありますね。メリット、デメリットを整理したうえで考えていく必要があります。集落移転であれば、土地をどう活用するかなどの対応も進めること。選択肢と、その組み合わせを模索する必要があるでしょうね。

徳田：ドローンが普及すれば、可能性も広がりますし。

林：一番悔しいのは、チャンスが来たときに余力が残っていないことです。

徳田：最後に、お一言ずつ。

小山：今の若い世代が、地域に関心が高いということを押さえておきたいと思います。11月に「作州の集い」が開催されるそうですが、若い世代がどんなことを考えているのかが気になりました。

玉置：「高森のいえ」のような実例は、集落によっても必要性が変わってくるかと思いますが、選択肢のひとつとして進めていきたい。3世代のなかで、高齢のおばあちゃんだけが集落から動かない。そういう場合でも、行政がサポートできるようにしなければならないと考えています。視察も、受けていきたいと思っています。

林：集落の戸数が20戸くらいだとなかなか動かない。10戸くらいになったときに危機感が生まれる。少ないからこそ動けるということもありのかなと思います。岡山に関しては、雪が少なく過ごしやすいと思います。使っていない耕作地をいつでも使える状態にしておくことは可能。まだまだ可能性はあると思います。

